
豊後街道と土木遺産めぐり

～熊本震災復興へ、未来へ～



二重峠の石畳と杉並木

参勤交代の道を、
歩いてみるのじゃ!

豊後街道は、
歴史を動かした道でござる。

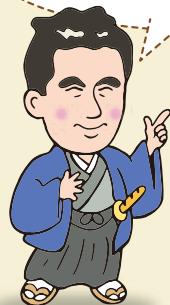
加藤 清正公

安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将であり、肥後熊本藩の初代藩主。築城と土木工事の名人であり、熊本では清正公(セイショコ)さんと呼ばれ、今も深く慕われています。



勝 海舟

幕末から明治初期に活躍した幕臣。咸臨丸で渡米し、帰国後に軍艦奉行に就任。戊辰戦争時には幕府軍の陸軍総裁となり、江戸無血開城を実現。明治維新後は参議、海軍卿などを歴任しました。



江戸時代に熊本城を建立した加藤清正公が、参勤交代路として豊後(肥後)街道を整備しました。この街道の沿線に伝わる逸話や足跡、土木遺産などを、この地にゆかりの加藤清正公と明治維新の要人・勝海舟の両名が案内します。

肥後・熊本から豊後・鶴崎へと九州を横断する幹線道路

豊後街道

火と水と森の都・熊本
そして
大自然あふれる阿蘇地域

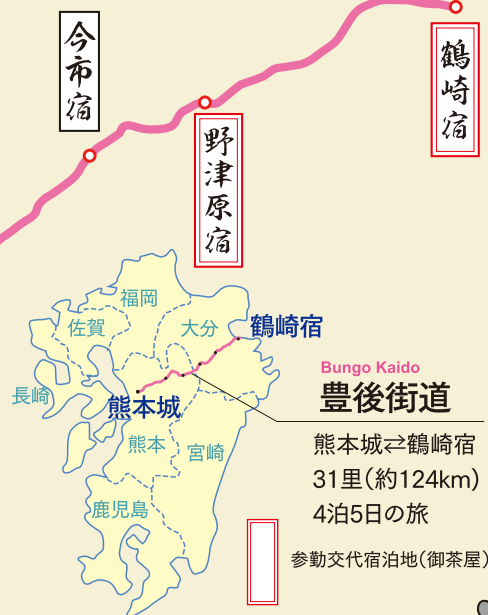
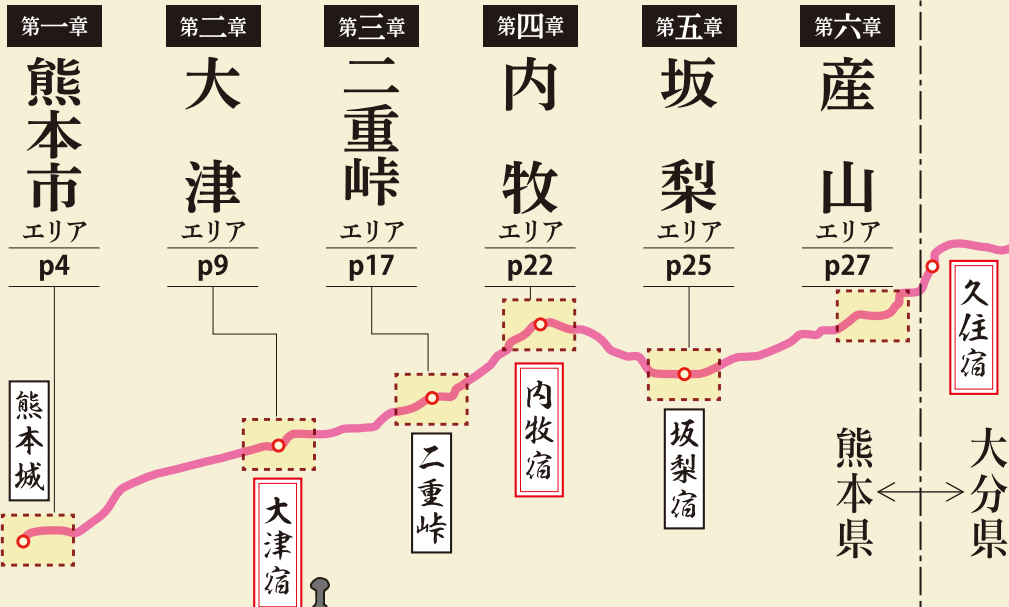
世界でも最大クラスの阿蘇カルデラと勢いよく噴煙を上げる阿蘇山は、火の国・熊本のシンボルです。そのカルデラと外輪山には、平地と比べて

倍近い年間3,000mmもの降雨量があり、その雨水は地下に染み込み、やがて熊本市街に清らかな湧水をもたらし、豊かな樹木や多彩な草花を育てています。

九州の中央に広がる熊本と阿蘇地域では、自然と人々の営みがバランスよく調和し、まさに火と水と森の魅力が溶け合った暮らしの環境が、遙かな時代から受け継がれてきました。

阿蘇カルデラと外輪山を越え、
大自然に行く豊後街道

緑濃い杉並木を歩き、のどかな田園風景を進み、外輪山を二度も越え、石畳の坂道を上るなど、九州を横断する豊後街道の行程は、実に変化に富んでいます。一里ごとに配された里数木を励みとして行き来した往時の旅人に思いを馳せ、街道沿いを歩いてみると、思いがけない発見と出会うことでしょう。



Bungo Kaido
豊後街道
熊本城⇔鶴崎宿
31里(約124km)
4泊5日の旅
参勤交代宿泊地(御茶屋)



**総距離約124kmに五宿を置き、
清正公が開いた豊後街道**

肥後の国・熊本から豊後の国・鶴崎へと至る豊後街道は、九州を横断する幹線道路として様々な役割を果たしてきました。熊本城を出発した後は、大津の杉並木、二重峠の苔むした石畳、阿蘇谷の田園、そして滝室坂と進む沿道には、江戸時代の面影が色濃く残っています。

この街道を開いたのは、戦上手で知られた戦国武将・加藤清正公です。

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いの武功によって肥後一国と天草郡を賜りましたが、瀬戸内海への横断路と防衛拠点を構想していた清正公は、天草郡の代わりに豊後三郡内に飛地領を願い出ます。

総延長31里(約124km)の豊後街道は、大阪城への道として整備され、肥後に大津、内牧の二宿、豊後に久住、野津原、鶴崎の三宿の計五宿が置かれました。

のちの肥後領主・細川氏も参勤交代路として長く利用しました。肥後から4泊5日で鶴崎に進んだ参勤行列

は、細川藩の御座船「波奈之丸(なみなしまる)」で瀬戸内海を渡り、東海道を進み、全行程35~38日という江戸への長旅でした。

わしが整備したのじゃ!



**人と情報が交流し、
産業・文化の発展を担う**

豊後街道を実際に歩いてみると、道幅の広さ、雄大な杉並木、緻密な石畳などに驚かされ、築造、維持に大変な努力と情熱が注がれたことが分かります。

この街道を行き来したのは大名行列だけではなく、商人や職人、旅人や飛脚など、多彩な人々が往来しました。

また、江戸や京・大阪などの先進の産業や文化、生活様式などを伝え、九州に新たな刺激を運ぶ役割を、この街道は担っていました。



第
一
章

熊本市 エリア



①熊本城

明治10年(1877)の西南の役で押し寄せた薩摩軍に包囲されながらも持ちこたえ、防御力の高さを実証しました。

築城の名手・清正公が心血を注いだ名城・熊本城

天正16年(1588)の肥後入国後、清正公は茶臼山の台地に熊本城を築くことを計画し、慶長6年(1601)の着工から7年間の歳月をかけ、天下の名城を完成させます。この城は、縄張りに工夫を凝らし、竣工当時は3つの天守閣、49の櫓、29の城門を備えていたそうです。周囲5.4kmに及ぶ城郭配置や反り返った“武者返し”の石垣は徹底した実戦型であり、



第一章 熊本市エリア

崩落した石垣を修復し、 石垣築造の技術を 継承する

平成28年(2016)の熊本地震により、熊本城は石垣の大規模な崩落や建造物の倒壊など甚大な被害を受けました。

しかし、すぐさま復旧工事が始められ、令和3年(2021)3月には天守閣全体の復旧が完了しました。天守の歴史を模型や映像で振り返る新しい資料展示に変わり、最上階からの雄大な眺望を楽しめるようになりました。

被災した石垣、建造物は計画的に復旧され、文化財的価値を保全する石垣築造の技術継承が進められています。



③ 里程元標跡
その昔、肥後藩の政令を掲示した「札の辻」に立ち、豊後・豊前・薩摩・日向の4街道の里数を測定する起点となりました。



④ 藤崎台クスノキ群
かつて藤崎八幡宮が鎮座した場所に、樹齢千年を超えるクスノキの巨木が7本も群生しています。



⑥ 立田口大神宮の赤鳥居
古い歴史を持つ立田口大神宮。この朱色の鳥居は、街道の熊本北部方面の目印でした。



⑦ 一夜塘(いちやども)之趾
寛政8年(1796)の白川の洪水後、細川斉茲(なりしげ)藩主がわずか半年で築いたという堤防です。

考え抜かれた城下町の独特の町割

清正公は熊本城の築城や街道整備と並行し、城下町づくりも進めています。古町地区は有事の際の軍事拠点として、碁盤目状の区画の中心に寺院を配した“一町一寺”の町割とされ、呉服町、鍛冶屋町、大工町など職人の町が続きました。細長い区画が並ぶ新町地区は商工業の町でありながら、敵の侵入に備えてわざと道筋をずらし、見通しが利かないよう工夫されていました。

この旧城下町でも熊本地震によって多くの町家が損壊しました。しかし、震災直後に地元有志が「くまもと新町古町復興プロジェクト」を立ち上げ、家屋のがれきの片付けを手始めに支援を行い、その後も町家の再建や新店舗の開設などを継続支援しています。

4街道の起点となった「札の辻」

西南の役の戦没者を祀る「清
爽園(せいそうえん)」
の隣、現在の新
町一丁目の御門
前に「札の辻」がありました。

藩の政令を領民に知らせる高札場ですが、この地点が豊後街道はじめ豊前街道、薩摩街道、日向往還という4街道の起点であり、里程元標を示す石碑が残されています。ここから各街道の両脇に、一里ごとに里数木である榎(えのき)を植え、距離の目安としました。



② 札の辻跡



⑤ 夏目漱石旧居(内坪井町)

6回も転居を重ねた 英語教師 夏目漱石

明治29年(1896)、第五高等学校に英語教師として赴任してきた夏目漱石は、熊本滞在4年3か月のうちに6回も転居を重ねています。

最も長く住んだ内坪井町の旧宅は、漱石記念館として公開され、自筆原稿や当時の写真などが展示されています。

⑧ 桜山神社・神風連の墓

明治維新の国難に殉じた肥後勤王党の二十三士と、神風連の乱に倒れた百二十三士が祀られています。



⑩ 二里木里数木

唯一の里数木 二里木の場所に立つ榎が、今も現存する

豊後街道は立田口から大津宿の区間が大津街道、そこから二重峠までは清正公道(せいしよこうどう)とも呼ばれています。

城下から立田口を出て東に向かうと、道路脇に二里木の石碑が現れます。

ここに茂る榎は、現存している唯一の里数木です。



⑨ 立田三ノ宮神社
寛文元年(1661)、細川家三代藩主・綱利が、街道通行の安全を祈願し、ここに遷座・造営しました。

参勤交代の行列を見守り続ける 剣聖・宮本武蔵

二里木里数木の碑を過ぎて進むと、JR豊肥本線武蔵塚駅の手前に「武蔵塚公園」があります。

肥後藩主・細川忠利の招きに応じて寛永17年(1640)、宮本武蔵は熊本を訪れ、以来、62歳で亡くなるまで客分待遇で過ごします。藩主の参勤交代を見守りたいという遺言に従い、鎧(よろい)・甲冑姿のまま、街道沿いのこの地に埋葬されたと伝えられています。



① 武蔵塚公園(宮本武蔵像)

水の流れを見極めること。
それが何より肝心。



土木遺産 in 熊本

熊本城を防御する空堀、それをまたぐ幅広アーチの「磐根橋」

熊本城が建つ茶白山と京町台地は、かつて地続きでしたが、細川氏が入国後、両地区の間に幅32m、深さ20mの空堀を掘り、防御に備えました。

時代は下って大正12年(1923)、鉄筋コンクリートの幅広アーチ橋・磐根橋が架けられます。橋梁を下から支える複数のアーチリブが力強く、独特の存在感を漂わせています。



磐根橋(いわねはし)
【土木遺産in九州】



土木の名人・清正公の知恵、白川に斜めに突き出た「渡鹿堰」



渡鹿堰(とろくぜき)
【土木遺産in九州】



熊本大学の近くを流れる白川は、龍神橋の上流で大きく湾曲します。

洪水時の出水を危惧した清正公は、水流に対して斜めに突き出た石造りの渡鹿堰を築きます。洪水時には水の勢いを和らげ、平時には灌漑用水を取水できるよう工夫したもので、築造時期は慶長11~13年(1606~1608)と伝えられています。

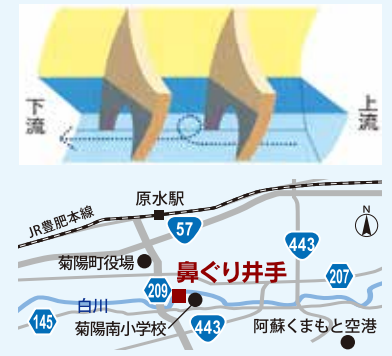
水底の土砂を渦で巻き上げて流す 画期的な「鼻ぐり井手」



菊陽町の菊陽南小学校の近く、白川左岸の曲手~辛川の間、慶長13年(1608)に築かれた鼻ぐり井手も、清正公が考案した治水事業の一つです。

岩山を掘削して水路を通し、その途中に約4~5m間隔で石壁を残します。その底部に直径約2mの穴をくり抜くことで、壁の穴をぐる水流が渦とともに土砂を巻き上げ、下流へと排出していくという絶妙な構造です。

鼻ぐり井手(はなぐりいで)【土木遺産in九州】



大津 エリア

敵襲への防御策、城の補修材として 街道に植えられた杉並木

城下を出発した豊後街道は大津宿の手前まで、現在の県道337号(旧国道57号)と同じ道筋を進みます。

江戸時代には道の両側に約20kmもの杉並木が続いていましたが、現在は菊陽町周辺に約11kmの緑の並木が残っています。

清正公はわざわざ屋久杉の苗を取り寄せて植え、厳重な管理を命じたそうです。敵の軍勢が迫ったとき、杉を切り倒して進軍を止める狙いがあり、城の補修資材としても活用できるといふ、清正公独自の戦術が秘められています。



14 大津街道の杉並木

幅広い道に杉が並び立つ姿は、いかにも街道らしい風景です。

沿道の人々が枯れた杉を植え替え、枝払いを行い、並木保存に尽力してきたことで、こうした緑濃い杉並木の景観が受け継がれてきました。

ここから豊後街道が向かう阿蘇地域も、平成28年(2016)4月14日と16日の熊本地震で、大きな被害に見舞われた地域の一つです。その震災復興への動きも取り上げ、紹介していきます。



12 三里木跡



『大津街道』

「日本の道百選」に指定された
由緒ある街道

豊後街道のシンボルとも言える杉並木が残る大津街道は、昭和61年(1986)に「日本の道百選」に指定されています。この街道沿いにある菊陽杉並木公園では、屋久杉の苗が育成されており、また、公園管理センターには、屋久島町から寄贈された「屋久杉根株」が展示されています。



屋久杉根株



19 日本の道百選の石柱



さすが、清正公。
この杉並木にも深い訳が
あったのでござるな。



20 五里木



22 西南之役戦跡

第二章 大津エリア



会所というのは、
いまの役所の
ことをごさる。



15 上井手



16 光尊寺



17 御高札場跡



18 大津手永会所跡



19 大津御茶屋跡



銅銭糖

手永会所跡や御茶屋跡に、大津宿のにぎわいを想う

杉並木を過ぎた参勤交代の行列は、一日目の宿、大津宿へ。豊かな流量の上井手が宿の中央を流れており、二代藩主・加藤忠広がこの用水工事に着手しましたが、加藤家改易のため中断します。その後、寛永14年(1637)に細川忠利が引き継ぎ、全長24kmを完成させ、約460haの広大な原野を潤しました。

これにより近隣の村々の年貢米が大津御蔵に集約され、木材や産物も集まり、人馬の往来も盛んになります。

上井手に沿って大願寺や光尊寺があり、どちらも見事な石橋が架かっています。かつては、上井手の水流を活用した水車約20輪が稼働し、精米、製粉、製材などの産業の原動力となり、のちに米粉加工による郷土の銘菓「銅銭糖」を生み出しました。

中町集落には、行政、教育、武道などを管轄した細川藩独自の天津手永会所の跡があり、また、参勤交代時に藩主が宿泊した大津御茶屋の跡には案内板が立てられています。

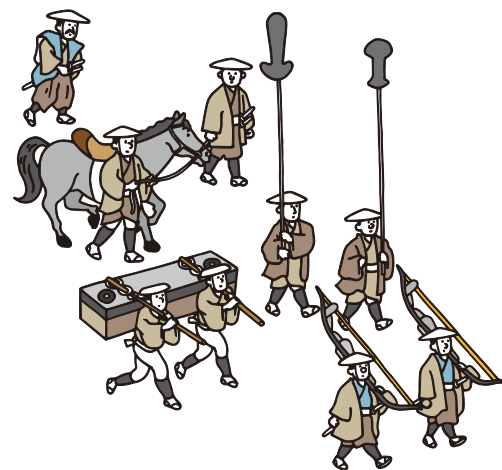
大津から二重峠(ふたえのとうげ)までの街道は、防御にも備えた「清正公道」

大津宿を出た街道は、阿蘇外輪山の麓から二重峠を目指して上ります。

行程の真ん中の高尾野に清正公道公園があり、大きな空堀のような凹型の堀切道が続きます。進軍する敵を両側の高所から挟撃できるように、という清正公の策略と伝えられています。一帯は桜の名所としても市民に親しまれています。



21 清正公道公園(上)と清正公道石碑(下)



22 西南之役戦跡

激戦地

政府軍と薩摩軍が互いに砲撃台を構えた

二重峠の付近には大きな石碑があり、二重峠西南之役戦跡と刻まれています。明治10年(1877)、薩摩軍が坂の上と下に砲台を構え、政府軍も砲台を築いて対峙し、この戦いでは政府軍が敗退したそうです。

後日、反撃に転じた政府軍が薩摩軍を大津方面へ追い払ったと伝えられています。

峠の上と下に分かれて、
砲撃戦が
展開されたとな!



第二章 大津エリア

着実に進められる
災害復興じゃ!



道の駅『大津』

熊本の魅力いっぱいの道の駅です!

国道57号沿い、阿蘇への玄関口にあり、地元特産の“からいも”と、その加工品が充実しています。辛子蓮根、馬刺しなど熊本名物がそろい、レストランではあか牛料理が味わえます。手作りが豊富な工芸館もあります。



道の駅「大津」

熊本震災復興へ、未来へ

阿蘇大橋の落橋という激震に、誰もが息を呑んだ

最先端技術を導入し、驚異的な架橋を実現した新阿蘇大橋

阿蘇大橋の崩落の知らせに、誰もが驚きました。しかし、新阿蘇大橋の架橋プロジェクトは平成29年(2017)に動き始めます。できる限り工事の効率化と迅速化を図るため、最先端技術を導入します。

急斜面でも大量の資機材を運搬できる工法を両岸に整備し、橋脚の施工には足場型枠一体型の工法を採用するとともに、橋桁の片持ち張出架設に超大型の移動作業車を導入するなど、省力化と安全性向上に加え、大幅な工期短縮を実現しました。

震度7の地震に2回も襲われた熊本では、多くの建物が崩壊しました。「東海大学阿蘇キャンパス旧1号館」では、地上に現れた地表地震断層の約25mを固定して保存・展示し、鉄筋コンクリートの柱が崩れた建物などを公開しています。



「東海大学阿蘇キャンパス旧1号館」が震災ミュージアムに

こうして令和3年(2021)、全長525m、橋脚の高さ97mという新阿蘇大橋が堂々完成し、熊本復興の輝かしいシンボルとなっています。



第一白川橋梁の架け替え工事が着実に進む南阿蘇鉄道



南阿蘇鉄道の第一白川橋梁は、熊本地震によって橋脚部に大きな変形・ゆがみが生じました。修復困難なため、架け替え工事に踏み切り、令和5年(2023)夏の全線開通を目指し、順調に工事が進められています。



熊本地震で土砂が崩落した「数鹿流崩」

阿蘇と南阿蘇の分岐点の先、阿蘇カルデラの外輪山の崖が幅約200mに渡って崩落し、約700mも流下したため、国道57号とJR豊肥本線が土砂に埋まってしまいました。その崩落現場を望む場所に、被災を忘れないよう石碑が築かれました。

震災で最大級の斜面崩壊「数鹿流崩」



数鹿流崩之碑



白川の治水の要(かなめ)である流水型の立野ダム

立野ダムは白川と黒川の合流地点から約1kmほど下流に建設されており、白川沿川の洪水被害の防止・軽減を目的とした洪水調節専用の「流水型ダム」です。平常時はダムの下部に設置している穴から川の状態で水が流れており、洪水時に一時的に水が貯留

される仕組みです。

熊本地震では、建設予定地周辺において土砂の崩壊が発生しましたが、迅速に復旧作業を完了し、平成30年8月にダム本体工事に着手しました。

令和5年出水期に効果発現するよう急ピッチで工事が進められています。



立野ダムの工事状況(令和4年7月末時点)



立野ダム完成イメージ図

資料提供：国土交通省 九州地方整備局 立野ダム工事事務所

土木遺産 in 熊本

高さ34mという橋脚で支える
最初期の鉄道橋・立野橋梁

国道57号を阿蘇方面に向かい、立野から谷へ降りる途中、立野ダム展望所があります。ここから緑の渓谷を流れる白川を背景に、立野橋梁を見晴らすことができます。南阿蘇鉄道に架かる赤茶色の鉄道橋は橋長136.8m。橋脚の高さは34mもあり、鋼材をトラス状に組み上げた美しい姿です。竣工は大正13年(1924)で



あり、南阿蘇鉄道は熊本地震で一部区間は不通となっていますが、この立野橋梁は被害を免れています。

立野橋梁【土木遺産in九州】



ちょっと寄り道

阿蘇中岳火口では地鳴り、噴煙に驚嘆。大自然の息吹を実感

標高1,506mの中岳に登り、噴火する火口を直接のぞき込むことができます。巨大な火口は直径600m、深さ130m、周囲約4km。溶岩の岩肌がむき出しになり、火口湖がエメラルドグリーン of 幻想的な姿を見せてくれます。激しい噴煙や地鳴りからは、大自然の力強さと地球の息吹が、直接肌で感じられます。



阿蘇中岳火口

※火口への立ち入りは、事前に「阿蘇火山防災会議協議会」のHPでご確認ください。



阿蘇火山の全貌を学ぶことができる『阿蘇火山博物館』

草千里ヶ浜の脇にある博物館では、多彩な資料展示によって火山の全貌を学ぶことができます。中岳火口壁に設置したカメラで、火口の状況が観察できるワイドスクリーンは、臨場感いっぱいです。阿蘇山上で自然をめぐり、ガイド付きトレッキングツアーも実施されています。



阿蘇火山博物館



中岳トレッキングツアー

阿蘇火山博物館

ガイドがついて
安心でござる。



ふたえの

とうげ

二重峠 エリア

二重峠の頂上では
阿蘇五岳とカルデラを見晴らす
パノラマが広がります。

遥かに阿蘇五岳を望み 悠久の時間を刻む石畳の道



24「岩坂村づくり」と刻まれた石
この石畳の道普請(みちぶしん)は公役(くやく)として、岩坂村など手永(てなが)単位で農民に課せられました。



25牛王(ごおう)の水
この周辺に修験者に信仰された乙護法の祠があったため、もとは護法の水と呼ばれていました。



26二重峠の急坂
急坂は、九十九(つづら)折りになっており、石畳が敷きつめられています。



27工具跡の残る石
工具の跡を残した石も見つかり、道普請に駆り出された農民たちの苦労がしのべられます。



28駕籠据場
二重峠の途中に設けられた駕籠据場は、休息のために設けられたものです。



29二重峠の杉並木
平坦になった石畳の道の両側に、背の高い杉並木が続いています。

第三章 二重峠エリア

峠から阿蘇谷に下る約1.6kmには 石畳の街道が健在

二重峠の石畳の道は幅約4m、全長約1.6km、標高差は約225mです。大きさも形も不揃いの石が敷かれ、細かく曲がりながら急坂を下って行きます。道脇に側溝が造られ、石の流失を防ぐための「水切り」と呼ばれる排水溝も整備され、その技術の高さ、丁寧さに目を見張ります。阿蘇の山道は急坂で



②三重峠

火山灰土のため、降雨の度に損傷が激しく、道普請(みちぶしん)には大変な労力が費やされました。そこで堅固な石畳の道を築造し、補修を重ねて大切に維持・管理していました。



③0参勤交代の檜
檜に杉が宿った大樹で、樹齢約500年と伝えられています。



③1めぐすり石
石の裂け目から、目の病に効くとされる水が湧き出してくる不思議な石です。

昔の面影が残る参勤行列の休息地、 石的の御茶屋跡

豊後街道の中でも一二を争う難所と言われた二重峠ですが、この峠を越えて阿蘇に入ると、街道脇に石的の御茶屋がありました。藩主専用の休憩所であり、一行はここで昼食を済ませ、次の宿泊地である内牧宿を目指したと伝えられています。

この石的御茶屋跡は、代々御茶屋番を務めた小糸家が、しっかりと手入れを続けてきたおかげで、昔日の面影が色濃く残されています。阿蘇の山々から湧き出た伏流水を池と庭園に巧みに取り入れた清冽な美しさです。

御茶屋跡の水源をたどると、清らかな水が湧き出る隼鷹(はやたか)天満宮に行き着きます。この神社の由来は、三代



③2石的御茶屋跡

藩主・細川綱利に関わるものです。綱利が参勤の途中、海が荒れて御座船が難破しそうになったとき、一羽の白鷹が船柱に舞い降りると、怒涛はたちまち静穏となり、無事に上陸を果たしました。この白鷹の靈験を崇敬した綱利が、社殿の建立を命じたということです。

おお!!
阿蘇山の伏流水を
めぐらした庭園は、
まさに絶景じゃ。



③3隼鷹天満宮
石的御茶屋跡を流れる小川の upstream、緑の木立に包まれた静穏な地に社殿があります。



③4神話の石「石的」
阿蘇開拓の神・健甞龍命(たけいわたつのみこと)が、往生岳(おうじょうだけ)に腰掛け、弓の鍛錬の石的にしたという大石です。

北側復旧道路の要「二重峠トンネル」



国道57号北側復旧道路の阿蘇市側。奥が二重峠トンネル



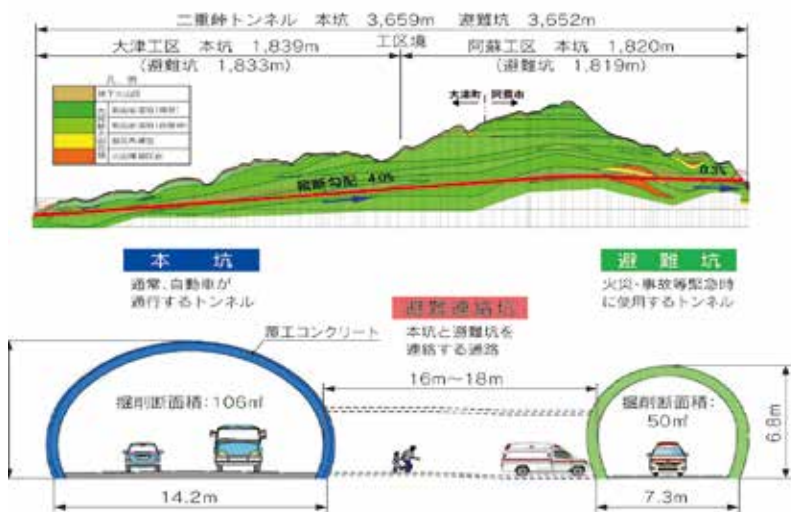
出典：国土交通省 九州地方整備局
熊本河川国道事務所ホームページより

国道57号は、熊本地震による大規模な斜面崩壊で寸断され、そのため通称「ミルクロード」と呼ばれる道路が当面の迂回路として活用されました。平行して早期の交通回復を目的に国道57号の復旧と北側に代替路となる約13kmの「北側復旧道路」の建設が平成28年(2016)から進められ、令和2年(2020)10月に同時開通しました。

急がれたのが延長約3.7kmの二重峠トンネル工事であり、本坑掘削期間の短縮を図った結果、4km規模のトンネルでは希有な約1年8か月の超短期間で貫通に至り、地震発生からわずか4年半で開通しました。

将来、「中九州横断道路」計画に期待を膨らませる事業となりました。

●二重峠トンネルの模式図



出典：国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所ホームページより

内牧 エリア

札の辻からちょうど40kmであり、豊後街道の3分の1の地点になります。参勤交代の一行は大津宿の次の宿泊地として、この内牧宿に泊まるのが慣例となっていました。

内牧宿に宿泊した参勤交代の一行

豊後街道は的石の御茶屋跡を過ぎて平坦な道を進み、内牧宿に向かいます。宿場の手前、内牧菅原神社の境内にそびえる、樹齢約500年というタブの木の大樹が目を引きま。阿蘇の冷涼な環境で長い間、枯死しないのは大変に珍しいということです。さらに進むと街道脇に十里木の木標が現れます。



第四章 内牧エリア

史跡内牧城跡には
内牧手永会所跡と内牧御茶屋跡が並ぶ

内牧城は天文年間(1532~1555)に築かれ、島津氏の侵攻によって落城したとされます。その後、清正公に仕えた加藤右馬允可重(うまのじょうよしげ)が内牧城代として入りますが、元和元年(1615)の一国一城令によって廃城となります。

かつての内牧城は典型的な平城でしたが、肥後藩主となった細川家は、城の本丸跡に参勤交代時の宿泊所である内牧御茶屋を築き、二の丸跡に政務を行う内牧手永会所を置いたとされています。

街道は内牧温泉街の中心部を走る県道であり、それに面して大門を設け、その奥に本門が築かれていたと伝えられています。



37 内牧城本丸跡・内牧御茶屋跡



内牧城本丸跡・内牧御茶屋跡案内板より



加藤右馬允は、忠義者であった!



36 内牧下町火除碑 38 内牧仲町火除碑 40 新町火除面碑

文化・文政年間(1804~1830)、内牧では大火が続いたため、町内に空地を設けて防火対策を進めたと伝えられます。

宿場町の面影伝える 曲線を描く白壁の町家

内牧宿に行く街道は、東西の出入り口に、大きく折れ曲がる柵形が設けられています。

宿場内を見通せないようにする工夫であり、白壁の町家が道に沿って曲線を描くのも珍しい景観です。



39 柵形に折れ曲がる宿場町



41 加藤右馬允公の墓所

右馬允さんの杉 福の神大黒天 善政で領民に慕われた加藤右馬允の墓所には、杉の大樹が茂っています。その足元には、宝くじの神として人気上昇中の大黒様が鎮座しています。



42 役犬原の自噴湧水群

阿蘇谷の役犬原(やくいんばら) 一帯では、地下水が地表より高く噴き上がる「自噴泉」がいたるところで見られます。



43 火焚き神事の案内板

ご神体である鬼八の首を暖めるため、里の乙女が59日間、「火焚き殿」にこもって火を焚き続けるという農耕祭事。国指定重要無形民俗文化財です。



44 鬼八の霊を鎮める霜神社

健甞龍命に無礼を働き、首を切られた家来の鬼八の霊は、阿蘇に霜の害をもたらします。この霊を鎮めるため、霜神社が創建されたと伝えられています。



阿蘇谷を見晴らす 『そらふねの棧橋』

内牧温泉近くにある展望所「そらふねの棧橋」は、標高653mの田子山の頂上からせり出す形で築かれ、大観峰から阿蘇五岳、立野までの雄大なパノラマが見渡せます。



そらふねの棧橋 (P22位置図参照)

坂梨 エリア

かつて屋号を持つ商家が軒を連ねていた、坂梨の街並み

豊後街道と高千穂へ向かう日向往還の追分でもある坂梨宿は、古くから交通の要衝であり、坂梨手永会所、坂梨御茶屋、坂梨番所などが置かれてにぎわいました。宿場通りに掲げられた「坂梨宿場通り散策図」には、屋号を持つ商家の配置が描かれ、その数50軒

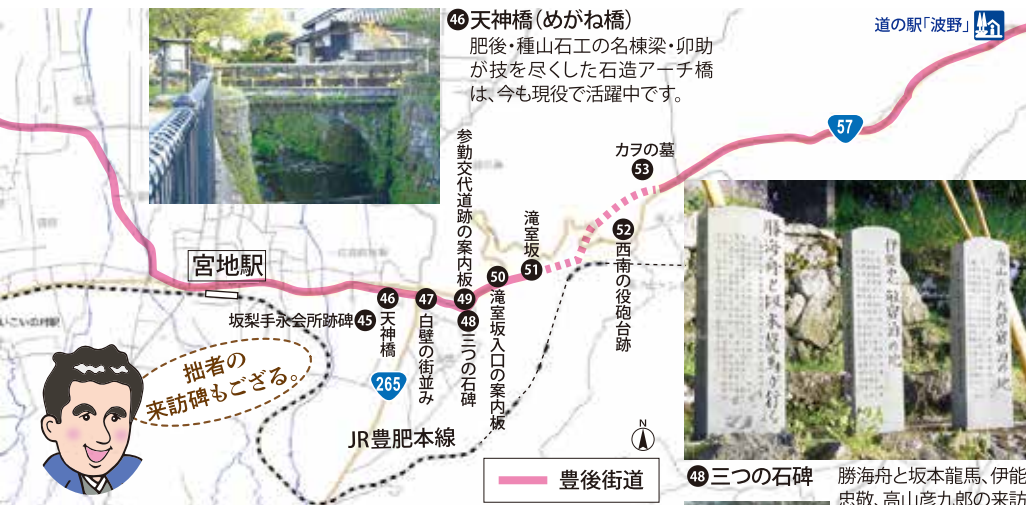
を超えていて、繁盛ぶりがうかがえます。宿場の真ん中には、肥後・種山石工の名棟梁・卯助が手掛けた単一アーチの端麗な石橋が架かり、宿場の歴史を感じさせます。



④7 白壁の街並みが続く坂梨



④5 坂梨手永会所跡碑



④6 天神橋(めがね橋)

肥後・種山石工の名棟梁・卯助が技を尽くした石造アーチ橋は、今も現役で活躍中です。

道の駅「波野」

カヲの墓

⑤2 西南の役砲台跡

④8 三つの石碑

勝海舟と坂本龍馬、伊能忠敬、高山彦九郎の来訪碑があります。

⑤3 カヲの墓

参勤交代で休憩する殿様に茶を献じた美女と言われる「カヲ」。その墓が杉林の中に建てられています。

⑤2 西南の役砲台跡に立つ慰霊碑

西南の役、折、阿蘇谷に進出した薩摩軍が、大分方面から進攻する政府軍に備え、この滝室坂の高台に築いた砲台の跡です。現在も共有地に円形状の塹壕と土壁が残されています。

江戸期の偉人、幕末の志士も数多く往来した歴史の道

近郷近在の産物が集積した坂梨宿は、武士や商人、参詣人などが数多く訪れました。

たとえば、日本初の実測地図を作成した伊能忠敬、勤王の志士・高山彦九郎、長崎へ急ぐ勝海舟と坂本龍馬なども行き来し、まさに歴史の道であることを実感できます。

コラム 道の駅「波野」 名物はそばと神楽



道の駅「波野」

国道57号で滝室坂を上ってしばらく行くと左手に「神楽苑」の提灯があります。地元野菜の直売所、波野のそば料理を楽しめる食事処があり、神楽情報も入手できます。

「坂梨に坂あり」 難所・滝室坂は標高差約200mの石畳の道

坂梨宿を過ぎると、眼前に東外輪山の壁が迫ってきます。これが豊後街道の最大の難所と言われた滝室坂です。「大阪に坂なし、坂梨に坂あり」と古くから言われたように、見るからに急峻な坂が続いています。参勤交代の一行は、坂梨宿の御茶屋で休息した後、一気に石畳の道を駆け上がったと伝えられています。

幕末に参勤交代が廃止され、明治から大正にかけて鉄道や道路の建設が進められたことにより、滝室坂の石畳の道はその役割を終え、歴史の彼方に影をひそめていきました。

滝室口から坂の上までの標高差は約200m。全長約3kmの道は、かつてはすべて石畳だったようですが、度重なる豪雨や土砂崩れにより敷石が流失し、今は坂の入口付近までしか上ることができません。



④9 参勤交代道跡(滝室坂)の案内板



⑤0 滝室坂入口に立つ歴史の道の案内板



⑤1 滝室坂の石畳

産山 エリア

昼なお暗い谷は、 人々を惑わせる「魔のへき谷」

道の駅「波野」を過ぎて国道57号と別れた街道は、深い谷を渡ります。ここがへき谷です。その昔、一帯はうっそうとした林に囲まれて昼でも暗く、道に迷う者も多く、「魔のへき谷」と言われました。

さらに進むと、熊本県の東端の産山村があります。産山の地名は、阿蘇開



55 へき谷の道標
産山村と波野村の境に立つ石碑には、「前熊本・鶴崎道」と刻まれています。

拓の神・健甞龍命の孫・惟人命(これひとのみこと)が、この地で生まれたことに由来しており、神話時代から続く古い村です。



56 水恩碑
明治24年(1891)、水源から8kmの水路を築き、10haの新田が開かれたことに感謝した碑です。



54 十五里塚

久住の惣庄屋が指揮して建造した、 産山に残る2本の石畳

豊後街道の中でも二重峠、滝室坂に次ぐ難所とされるのが、産山の山間を貫く弁天坂の石畳約80mと、境の松の石畳約160mです。これらは文化4年(1807)から4年の歳月をかけ、久住の手永惣庄屋・久住善兵衛の指揮のもと、地元の人々の公役で築かれたものです。

弁天坂の石畳は、林の間を縫うようにゆるやかに曲がりながら続く坂道です。境の松の石畳は、道の両側に堅牢な側溝が設けられ、苔むした石がきっちり敷き詰められています。かつては国境の標に松の木が植えられていましたが、現在は杉の林が見られるのみです。



58 日本一の鞍掛榎(くぬぎ)
弁財天が牛の鞍を掛けた、という伝説から名付けられた日本一の大榎です。



57 弁天坂の石畳



59 境の松の石畳



『九州横断する 小・中学生』 豊後街道をたどる

大分市鶴崎から久住、阿蘇を経て熊本城まで、約124kmの豊後街道を、小・中学生が一週間かけてたどる「参勤交代・九州横断徒歩の旅」は、コロナ禍での中止はありましたが、昭和56年(1981)から熊本地震時にも欠かすことなく続けられています。



子どもたちは地震の被災地を直接、見ることによって、自然の猛威と向き合い、街道の歴史に触れながら自然と人間の関わりをより深く学ぶことができています。

豊後の二宿に築かれた、石畳の道と石張水路

豊後の国に入ると、街道の次の宿場は久住宿、それから今市宿です。ここには全長660mもの石畳が残されています。道幅8.5mのうち中央部分2.1mに平石が敷き詰められた見事なものです。

次の宿場は野津原宿です。この地の惣庄屋・工藤三助は、水不足に苦しむ領民を救うため、3本の石張水路・野津原三渠(のつはるさんきょ)を開削しました。その功績をたたえた記念碑を

見て、勝海舟が「これは凄い。偉い人がいたものだ」と感服したと伝えられています。



野津原三渠
【土木遺産in九州】

野津原三渠の碑

野津原三渠の碑

今市石畳



今市石畳

今市石畳【土木遺産in九州】



海陸交通の要衝に築かれた肥後藩の統治拠点・鶴崎御茶屋

豊後街道の終点は鶴崎宿です。瀬戸内海に面した鶴崎を領地とした清正公は、大野川河口に堀川を築いて船着場とし、海陸交通の拠点として整備しました。現在の鶴崎小学校の周辺には、藩主の宿泊所となる鶴崎御茶屋が築かれました。これは、のちの細川氏にも引き継がれ、郡会所や詰所、銀蔵や武器庫などの役所が置かれ、政治・経済・軍事の中心として、肥後藩の支庁の役割を果たしました。

鶴崎から大阪への航海の無事を祈り、細川氏が創建した劔八幡宮(けんはちまんぐう)には、大船団が写実的に描かれた「熊本藩船鶴崎入港絵船馬」が奉納されています。



60 参勤交代時船着場跡

JR鶴崎駅の東、新堀公園には「御座船発着所跡」の石碑が残されています。

61 鶴崎御茶屋跡

鶴崎小学校の校庭に「鶴崎城跡 熊本藩鶴崎御茶屋跡」の石碑と案内板があります。

62 加藤清正公の銅像

法心寺の門前に立ち、清正公と鶴崎の由来を述べた碑文が添えられています。

鶴崎から海路大阪へ向かう御座船「波奈之丸」に乗り、



63 (左)熊本藩主細川氏御座船鶴崎入港図
鶴崎に入港する御座船「波奈之丸」(大分市観光課:大分市熊本、緑の名所案内板より)

66 (右)劔八幡宮
正保3年(1646)に創建され、鶴崎総鎮守として尊崇を集めています。春季大祭の勇壮な「けんか祭り」が有名です。

激動期に活躍した偉人たちの事績

慶長6年(1601)に清正公が鶴崎に建立した法心寺の近くに、勝海舟と坂本龍馬の石像が立っています。

幕末の激動期、江戸から大阪、瀬戸内海経由で佐賀関に上陸した二人は、鶴崎御茶屋に宿泊します。「勝海舟日記」には「豊後鶴崎の本陣に宿す。(略)山川水清、川口浅し」と記されています。この後、二人は豊後街道を歩き、長崎へと向かいました。

二人の石像のすぐ南、幕末から明治時代にかけて儒学者・教育者として活

躍した毛利空桑(もうりくさう)の記念館があります。数多くの塾生が学んだ「知来館」、居宅跡の「天勝堂」、文献や史料を展示する「遺品館」が整備されています。



65 毛利空桑記念館

空桑が開いた私塾「知来館」では、約900名近い門下生が、厳格な塾則のもとで熱心に学んでいました。

64 勝海舟・坂本龍馬の石像

鶴崎に宿泊したのを記念するものであり、激動期に二人はこの地で思索を重ねたという解説が添えられています。



細川家舟屋形

ひとくちメモ

現存する波奈之丸の御座所部分「細川家舟屋形」は、国指定重要文化財です。以前は熊本城の天守閣に展示されていましたが、温度・湿度管理が難しいため、平成28～30年(2016～2018)に、熊本博物館へ移築されています。

各施設の問い合わせ先



熊本城総合事務所
tel. 096-352-5900



熊本博物館
tel. 096-324-3500



熊本県観光交流政策課
震災ミュージアム
tel. 096-333-2011



阿蘇インフォメーションセンター
tel. 0967-34-1600



(一社)うぶやま未来ラボ
産山村観光協会
tel. 0967-25-2200



土木遺産 in 九州
(一社)九州地域づくり協会
tel. 092-476-5680

◆ 参考文献 ◆

『豊後街道を行く』松尾卓治著・弦書房・2006年10月発行／『九州横断の道 阿蘇くまもと路』ルートガイド編纂委員会著・九州風景街道推進会議・2017年12月発行／『熊本地震復興へ プロジェクト九州7巻』玉川孝道編著・一般社団法人九州地域づくり協会・2017年8月発行／『熊本県の歴史散歩』熊本県高等学校社会科研究会編・(株)山川出版社・1993年6月発行／『熊本を歩く』磯あけみ編著・(有)海鳥社・1987年6月発行／『九重花便り』上野哲郎著・不知火書房・1988年7月発行／『加藤清正のすべて』安藤英男編著・新人物往来社・1993年4月発行／『詳説日本史(新版)』井上光貞編著・(株)山川出版社・1984年3月発行／『[歴史群像]名城シリーズ② 熊本城』太丸伸章編・(株)学習研究社・1994年8月発行

【写真提供】熊本県観光連盟／阿蘇市経済部観光課 【地図】国土交通省 国土地理院

◆制作・発行◆

一般社団法人九州地域づくり協会 令和4年(2022)10月発行

ご注意:本書の内容の一部または全部を無断で複製・転載・改編することはできません。

非売品